

# 国語問題

## 〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二、問題は二十ページに渡っており、〜で構成されている。  
ページの抜けや印刷不備があった場合には、直ちに試験監督の先生に申し出ること。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

一

次の①～⑩の——線部について、漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 山の頂たかねに登る。
- ② お年玉を貯金たくわんしている。
- ③ 綿棒わたぼうを使って消毒する。
- ④ 美しい夜景よるけいをながめる。
- ⑤ 大切な試験しけんに臨むまむ。
- ⑥ レキシレキシの勉強べんきょうをする。
- ⑦ シゲンシゲンを大切にする。
- ⑧ 太平洋横断たいへいようおうだんのコウカイコウカイに出る。
- ⑨ ココロヨココロヨい風かぜが吹ふいてくる。
- ⑩ 彼はかれジヨジヨレツレツを重おもんじる人だ。

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

中学校の入学式の日、<sup>①</sup>よういどん、とクラス全員で一斉にスタートを切った。はずが、気がつく、自分だけ遅れをとっていた。軽やかに前を行くみんなについていけなかった。

三月生まれのせいかもしれない、と田町は思う。みんなよりも遅くに生まれたぶんだけ、何をするにも人より時間がかかる。勉強の問題を解くのも、給食を食べるのも、着替えをするのも、いつもビリ。小学生のときからそうだった。

でも、これまではどのクラスにも、自分とさほど変わらない「ビリに近い子」がいてくれた。性格も、見た目も、どんくさいところもよく似た女の子。田町はそんな子の陰に隠れて、目立たないようにと息をひそめてきたのだ。

中学校へあがり、一年A組に「ビリに近い子」がいないのを知ったとき、だから、田町はうろたえた。クラスメイトの女子たちはみんなおとなびっていて、セーラー服のスカートが曲がっているのも自分だけ。一体どこに隠ればいいのか？ 机の数が少ないせいか、新しい教室はひどく

A

A していて、身をひそめる場所なんてどこにもなさそうだった。

ぼうつとしていた田町を置きざりに、女子のあいだでは

B

B グループが形成されていく。小六のときにおなじクラスだったしほりんも、あぶれると思っていた久保さんも、ほかの子にとられた。田町を気づかなくて話しかけてくれる女子たちも、すぐにまた本物の仲よしのもとへもどっていく。

早く隠れなければ。田町は日に日にあせてきた。早く、早くしなければ、怖い鬼に見つかってしまう――。

苦手なスポーツテストがあった四月の末、はじめて仮病を使って学校を休んだ。あれがいけなかった。田町は気づいてしまったのだ。自分の家が一番安全で居心地のいい隠れ場所であることを。

以来、三日に一度、二日に一度、と C 欠席が増えていき、今ではまったく学校へ行かなくなってしまった。

気がつくと、十月。中学一年生もすでに半分が終わっている。

② もう隠れる必要もないんじゃないかと、田町はときどき思う。地味でおとなしい女子のことなんかみんなはとうに忘れて、一年A組では二十三人の時間があたりまえのように流れているのに、自分だけが必死で「まあだだよ」「まあだだよ」とさげびつづけているような。

ときどき、真琴とヒロが様子を見にきてくれると、それがクラス委員の仕事だからだとわかっている、まだかろうじてあの教室とつながっているように思えて、少しだけほっとした。

「果歩ちゃん。学校のお友達よ」

その日も、夕方、部屋で漫画を描いていたところをおばあちゃんに呼ばれ、田町はあわてて原稿を机の引きだしに隠した。

時計を見ると、四時半。部活帰りのふたりにしては早いと思いつつも、ぼさぼさの髪を整え、いつもの面会場所である居間の戸を開ける。

③ そこに、いつもとちがう三人の顔を見たときは、もう少しで悲鳴をあげそうになった。

居間の円卓を囲んでいたのは、おなじクラスの陸と心平、そしてまだ名前もおぼえていないもうひとりの男子だったのだ。

「なんでりつくくんがここに？」

「なんでこのふたりと？」

「あ、う、おじゃましてます」

「おっす」

「あ……ひさしぶり」

雨に濡れた学ランの肩を所在なげに揺すっている三人の前で、田町はパニックを起こしながらも反射的にシャツの袖を引っぱり、左手首にしていた虫よけリングを隠した。

もうとうに匂いも消えている薄緑のリング。

セミのぬげがらを探したあの日、陸に返しそびれたそれを今でもときどき身につけていること。そうしていると落ちつくこと。自分だけの秘密であるそれを、陸に知られたくなかったのだ。

あの日。近所の公園で陸と出くわしたあの瞬間を、田町は夏の陽射しもろともくつきりと思いだせる。

ベンチの上からふりむいたそこに陸が立っているのを見たとき、見つかった、と思った。長い長いかくれんぼのはてに、ようやく誰かに見つけてもらったような。

陸は幼稚園に入る前からの幼友達だ。話をするのは数年ぶりだったのに、おっとりとして気の優しい「りっくん」の面影が残っていたせいか、人みしりの田町も陸とはかまえずにむきあうことができた。自然な自分でいられた。何かといえば虫の話をするのには少々辟易したもの、陸が自分の不登校を気にしてくれているのを知ったときには、<sup>④</sup>のどの奥がじんとして泣きそうになった。

なのに、情けない不登校の理由をうまく伝えられず、はがゆい思いでもじもじしているうちに、こまった事態におちいった。急に、猛烈に、おしっこがしたくなったのだ。

トイレに行つてくる。そのひとことが恥ずかしくて言えず、我慢して、我慢して、もう限界——と、そのとき、一匹の蝶を追って陸がベンチを離れた。

今だ！ 陸が背中をむけている隙に、田町は一目散に公衆トイレをめざして走ったのだった。<sup>⑤</sup>せつかく楽しかった時間を、あんなふうにならわらせてしまったことを、今でもくやんでいる。

陸だけの秘密の丘へ連れていってくれたのに。お守りみたいな虫よけリングを貸してくれたのに。ひさしぶりに誰かと笑いあえたのに。

なのに、バイバイもありがとも言わずに帰ってしまうなんて、最低だ。陸はあきれているだろう。そう思うと、ますます

学校へも行きづらくなった。

あれ以来、ずっと心にひっかかっていた陸が、なぜか今、自分の家にいる。クラス一ひょうきんものの心平と、お父さんみたいに落ちついた男子と一緒に。

なんでだろう？

なにがどうなれば、こういうことになるんだろう？

学ランが三つもあるせい、古びた畳を敷いた和室は異様に黒っぽく、威圧的に見える。自分の家が自分の家でなくなったみたいで、田町はどこへ目をやればいいのかもわからなかった。

「ボクたち、わざわざ来てくれて、どうもありがとうねえ。とりあえずこんなものしかないけど、今ね、わたし、ジュース買ってくるから。すぐ買ってくるから、待っててね」

お茶を運んできたおばあちゃんも気が動転しているのか、ジュースがなければこの男の子たちは幻と化してしまう、とばかりの剣幕で家を飛びだしていく。一度は傘を、一度は財布をとり引きかえしてきたその足音が去ると、部屋のなかはますますしんとした。

残された田町は心細くてたまらず、何かに触れたくて湯飲みへ手をのばした。

熱い。と思った矢先、円卓ごしに「アチッ」と心平の声がした。

「アチチチチチーッ！」

見ると、舌をのばして犬のようにハアハアし、おおげさにもがき苦しむ演技をしている。

この男の子はあいかわらずだ。まじまじながめていた田町と目が合うと、心平は舌を引っこめて「でへっ」と笑った。

「あかさ」

笑いながら、でも、目だけは笑わずに田町を見すえている。

「ひと月後に、学校の合唱コンクールがあつてな」

合唱コンクール。予想外の出だしにきよとんとする田町に、続けざま、心平は驚愕のひとことを突きつけた。(注5)

「田町、ピアノの伴奏してくれへん？」

意味がわからずに田町は瞳をしばたいた。時間ごと凍結してしまったかのように、返事をするどころか息さえも止まった。

「伴奏？」

「ピアノ、弾けるんやろ」

覆いかぶせるように心平が言う。おほ

「うちのクラスでピアノが弾けるの、田町と楓雅しかおらんのかな。楓雅はテクはあるかもしれんけど、ハートがあかんから、クビにしたった。なにがスマホか。ちゆうことで、ここはひとつ、田町にやってもらうしかあらへんねん。な、頼む。みんなのために伴奏、引きうけてくれんか」

こうなると田町はもうダメだ。テンポの速さについていけない。ハート？ スマホ？

「待って」

頭の整理がつかないまま、ようやくひと声、しぼりだした。

「無理」

「なんで。ピアノ、弾けるんやろ」

「それは……」

「習つとるんちゃうの」

「小六まで、だし」

「いつから？」

「五歳」

「ベテランやん！」

「でも、伴奏なんて、無理」

「そう言わんで、頼む。田町しかおらんのか」

心平が身を乗りだし、円卓のふちに両手をつけて、がばつと頭をさげた。

「この通りや！」

田町はもうびつくりしすぎて声もなかった。

心平はクラスの人気者だ。いつも教室のまんなか、一番明るいところにいる。その心平が、一番暗いところにいる自分に頭をさげている。

⑧「一年A組には田町が必要やねん！」

そのひとことに田町はハツとした。

必要やねん——。

家にこもるようになってから、真琴とヒロが何度も足を運んでくれた。時にはクラスメイトたちの手紙も届けてくれた。みんなが心配してくれた。励ましてくれた。優しい言葉をかけてくれた。でも、必要だと言われたのは、はじめてだった。

こんな自分でもクラスの役に立つ。その事実を、田町は時間をかけて頭にしみこませようとした。にわかには信じられないから、ゆっくり信じようとした。

けれども、まだ十分な時間をかけないでいるうちに、再び心平が口を開いた。

「一年A組はB組よりダメなクラスかもしれないけど、やっと学校に来た田町をいじめるようなヤツはおらんよ。けど、もしもおったら、オレが守ったる。この心平が絶対、許さへん。そやから安心してどつてきたらええわ」

力強く、勇ましく、心平は言いきった。そのどنگりまなこは自信たっぷり、曇りのかけらもなく、ああ、これが教室のまんなかにいる子の目なんだと、田町は急に醒めた心で思ってしまったのだ。

⑩隠れ場所を探したことなど一度もなく、つねに胸を張って生きてきた子の目。あたしもこんなふうに生まれていたら、不登

校なんかしないですんだだろう。

心平の言葉にうそがないのはわかっていた。この男の子は本気で自分を守ろうとしてくれている。けれど、わかっ**てはくれない**だろう。学校にも行けずにいる自分が、ピアノ伴奏などという大役を引きうけるのに、どれだけの勇気をふりしぼらなければならぬのか。いくら言葉を尽くしても、きつと、この子にはわからない。

「やつぱり、あたし……」

あたしには無理。ごめんさい。

そう言つて田町が頭をさげようとした、そのとき。

それまでひとことも口をきかずにいた陸が、心平のとなりでずっと鼻をすすった。

田町が目をやると、メガネが落ちそうなほどに頭をたらしした陸は、小刻みに全身を震わせながら「うつ、うつ」としゃくりあげている。卓上に滴りおちているしずくは、どうやら雨粒ではなさそうだ。

「りっくん……?」

「ぼくが、ぼくが、言えなかったから……」

ひと息ごとに喉をつまらせるような鳴咽をもらしながら、陸はか細い声で切れぎれに言った。

「ぼくがあのとき……あの日に、言えなかったから。心平くんみたいに、ぼくが、言つてたら、言えてたら、そしたら……そしたら田町はもっと早く、学校に、もどつてこれてたかもしれないのに……」

田町には陸が何を言っているのかさっぱりわからなかった。

りっくんが言う? なにを? あの日つて? あの夏の日のこと?

「りっくん、なんで……?」

田町のかすれた問いかけに、陸は何も言わずただただ肩を震わせている。その学ランの肩の部分は、なぜだかほかのふたりよりもたくさんの雨水を吸つていて、まるで陸だけが嵐のなかを来たみたいだ。

傘をさすのが下手な男の子。その濡れた肩をながめているうちに、事情もなにもわからない田町の目にも涙がにじんできた。<sup>14</sup> 田町がずっと引きずってきたあの日を、陸も陸で引きずっていた。陸にしかわからない何かを、たぶん、とても不器用に抱えて、今までそれを手放さずにいてくれた。

学校に行けないのは、自分が弱いせいなのに。

あたしが楽をしていただけなのに。

あつけにとられているふたりの男子をよそに、陸はひつくひつく泣きつづけ、<sup>15</sup> 田町も田町で静かに泣いた。  
あの夏のセミのようにふたりで泣きつづけた。

(森 絵都『クラスメイツ(後期)』)

(注1) 学ラン…学生服のこと。男子学生の詰め襟えりの制服を指すことが多い。

(注2) 辟易…困りはてること。勢いにおされて引き下がること。

(注3) 威圧的…強い威力いかりでおどし、相手を押さえつけるような様子。

(注4) 剣幕…怒りいかや興奮の気持ちいきもちがあらわれている表情や態度のこと。

(注5) 驚愕…非常に驚くこと。

(注6) 楓雅…田町たちのクラスメイト。合唱コンクールのピアノ伴奏の係だったが、放課後の練習に参加することを面倒めんどがり、スマートフォンに伴奏を録音したものを流せばよいと心平に言っていた。

(注7) テク…テクニク(技術)のこと。

(注8) 嗚咽…声をつまらせて泣くこと。

問一

——線①「よいどん、とクラス全員で一齐にスタートを切った」とありますが、それは田町にとってどのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中学校生活でのさまざまなことを他の生徒と競う生活が始まったということ。
- イ 中学校生活でのクラスの団結を重視してみんなが協力をちかかったということ。
- ウ 中学校生活を生徒たちが一緒に歩んでいけるように速度を合わせたということ。
- エ 中学校生活を楽しく過ごすために共通の目標に向けて努力を始めたということ。

問二

A

く

C

に入る適切なことばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。同じ記号を二度使ってはいけません。

- ア だらだら
- イ どんどん
- ウ とげとげ
- エ ずるずる
- オ すかすか
- カ のろのろ

問三

——線②「もう隠れる必要もないんじゃないか」とありますが、田町がそう思う理由として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 中学一年生の十月になるとみんな体も成長するので、クラスメイトのかけにかくれることができるだろうと思ったから。
- イ 学校に行かない期間が長くなったことで、クラスでは自分がいないことがあたりまえになっているだろうと思ったから。
- ウ 目立たないようにしなくても、誰からも注目されないおとなしい自分のことを、みんなが忘れていだろうと思ったから。
- エ 四月の末から始まったかくれんぼが、十月の今まで続いているはずがなく、鬼をおそれなくてよいだろうと思ったから。
- オ 自分が学校に行かない間に、クラスには自分のような「ビリに近い子」がほかに現れているのではないかと思ったから。

問四 — 線③「いつもとちがう三人」とありますが、いつも田町の家に来るのはだれですか。次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア しほりん      イ 久保さん      ウ 真琴      エ ヒロ      オ 果歩ちゃん

問五 — 線④「のどの奥がじんとして泣きそうになった」とありますが、このときの田町的心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 陸が自分のことを心配してくれていたのに、虫の話を聞くのを面倒に思っていた自分を情けなく思っている。  
イ 幼友達の陸が自分の弱みに気づいてくれていたのに、強がって無理をしていたことを失敗したとくやんでいる。  
ウ 自分一人だけがかくれんぼを続けているつもりだったのに、陸が参加してくれていくことを知り、感激している。  
エ クラスのみんなに忘れられていると思うていたのに、陸が自分のことを気にかけていたとわかってうれしく思っている。

問六 — 線①「一目散に」・②「あっけにとられている」はどのような意味ですか。最も適当なものをそれぞれ後の中から選び、記号で答えなさい。

- ①「一目散に」
- ア 驚くくらの速さで  
イ わき目もふらず必死になって  
ウ はずかしさは胸にしまっておいて  
エ 人に見つからないよう気をつかって

⑥「あっけにとられている」

- ア 悲しい場面を前にして同情している
- イ 心配したことが現実になりあわてている
- ウ 意外なことに出会って驚きあきれている
- エ いやなことが起こり投げやりになっている

問七 — 線⑤「楽しかった時間」とありますが、田町がこの時のことを今でも大切にしていることがわかる行動を、本文中のことは使って、三十字以内で答えなさい。

問八 — 線⑥「一度は傘を、一度は財布をとり引きかえしてきた」とありますが、ここから、「おばあちゃん」のどのような様子かわかりますか、解答欄に合う形で本文中から抜き出して答えなさい。

問九 — 線⑦「おおげさにもがき苦しむ演技をしている」とありますが、この時の心平の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の面白い動作で田町を笑わせて、このあとの頼みごとに田町がいやと言えないようにしている。
- イ どんなどきにも他の同級生と違った動きをすること、自分は注目される存在なのだとして示している。
- ウ お茶が熱かったことを面白おかしく伝えることで、田町やおばあちゃんを困らせないようにしている。
- エ 田町の心をほぐしてその場の雰囲気ふんいきを和らげ、自分がこれから頼もうとすることを持ちかけやすくしている。

問十——線⑧「一番明るいうところにいる」とはどのようなことですか。説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えな  
なさい。

ア クラスの誰からも慕われる中心人物であるということ。

イ いつも教室の中央の席に座り、目立っているということ。

ウ 落ちこむことなく、友人と朗らかに接しているということ。

エ 陽気な性格の友人が多く、その影響を受けているということ。

問十一——線⑨「そのひとことに田町はハツとした」とありますが、このとき田町はどのようなことに気づいたのでしょうか。田町  
のせりふの形で答えなさい。

問十二——線⑩「醒めた心で思ってしまったのだ」とありますが、田町がこのような心情になってしまったのはなぜですか。説明と  
して最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ピアノを弾けるという点でしか自分が求められていないとわかったから。

イ 心平が自分とは正反対の性質を持つ存在なのだということに気づいたから。

ウ いつも一人で考えているので、冷静に判断することが習慣になっていたので。

エ 心平が自分の不登校の理由をいじめだと勘違いしていたことがきっかけから。

問十三

——線⑩「けれど、わかってはくれないだろう」とありますが、このように感じた田町の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自信を持って生きている心平には、なるべく人の前に出たくないという自分の自信のなさを想像できないだろうという気持ち。

イ うそをついたことがない心平には、さまざまな理由をつけて登校しない自分の気持ちを想像できないだろうという気持ち。

ウ 目的に向かってまっすぐに進む心平には、ピアノの伴奏の練習がどれだけ負担になることなのかは理解できないだろうという気持ち。

エ すべてのことはきつとまうまくいくと考える心平には、ピアノを上手に弾けないかもしれないという不安を理解できないだろうという気持ち。

問十四

——線⑫「あるとき……あの日」とは、どの日のことですか、本文中より十五字以内で抜き出して答えなさい。

問十五

——線⑬「言えなかった」とありますが、陸が言いたかったのはどのようなことですか、解答欄に合うように自分で考えて十字以内で答えなさい。

問十六

——線⑭「田町がずっと引きずってきたあの日を、陸も陸で引きずっていた」とありますが、この時田町と陸はそれぞれどのようなことを引きずっていましたか。説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 田町はトイレに行くとき正直に言えばよかったと反省しており、陸は気乗りしない田町をむりに丘へ連れ出したことで嫌われたのではないかと悩んでいる。

イ 田町は虫の話聞くのに飽きてトイレへ行ってしまったことを申し訳なく思い、陸は不登校で家にいる田町をかくれんぼに誘ったのはいけなかったと思っている。

ウ 田町は虫よけリングを陸に返さずに別れてしまったことをどうしても謝りたいと考えており、陸は笑っていた田町が急にいなくなった理由がわからず困っている。

エ 田町は陸にだまってその場を離れたことを後悔しており、陸は自分が蝶に夢中になって田町を放り出してしまったことが原因で田町が帰ってしまったと思い、気にしている。

問十七

——線⑮「田町も田町で静かに泣いた」とありますが、このときの田町の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 心平のことは気に取られてしまい、陸の自分を心配する気持ちに無関心だったことを反省している。

イ 久しぶりの再会に陸が変わっていないことに安心し、彼の涙につられて悲しみがこみ上げてきている。

ウ 学校に行けないことを情けなく思っているが、陸が自分を気にかけてくれたことに感激している。

エ 三人での訪問と励ましに感謝しているが、それでもピアノ伴奏を引き受けられない自分にいら立っている。

## 三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

踏まれても踏まれても立ち上がる。

これが、多くの人が雑草に対して抱く一般的なイメージだろう。人々は、踏まれても負けずに立ち上がる雑草の生き方に、自らの人生を重ね合わせて、勇気付けられる。

I、実際には違う。雑草は踏まれたら立ち上がらない。確かに一度や二度、踏まれたくらいなら、雑草は立ちあがってくるが、何度も踏まれれば、雑草はやがて立ち上がらなくなるのである。

雑草魂だまし魂というには、あまりにも情けないと思うかも知れないが、そうではない。

II、どうして立ち上がらなければならないのだろうか。

雑草にとつて、もつとも重要なことは何だろうか。それは、花を咲かせて種子を残すことにある。そうであるとするれば、踏まれても踏まれても立ち上がるという無駄なことにエネルギーを使うよりも、踏まれながらどうやって種子を残そうかと考える方が、ずっと合理的である。

III、雑草は踏まれながらも、最大限のエネルギーを使って、花を咲かせ、確実に種子を残すのである。まさに「変えてはいけないもの」がわかっているのだろう。努力の方向を間違えることはないのだ。

踏まれても踏まれても立ち上がるといふ根性論よりも、雑草の生き方はずっとしたたかなのである。

日本の家には、代々続く「家紋」と呼ばれるものがある。

古くから人気の高い家紋で、日本の五大紋の一つにも数えられているものに「かたばみ紋」と呼ばれるものがある。かたばみ紋は、特に、戦国武将が好んで用いていた。

しかし、不思議なことがある。

かたばみ紋（注2）のモチーフとなったカタバミは、けっして珍しい植物ではない。道ばたや畑など、どこにでもあるありふれた

雑草である。しかも草丈は一〇センチにも満たないような小さな雑草であるし、花も直径三センチほどのほんの小さな花である。御世辞にも美しい花とは言えないし、松竹梅のようにめでたい植物とも言えない。【A】

どうして、こんなにもつまらない雑草が、武家が好むような立派な家紋として利用されたのだろうか。

戦国武将にとって、大切なことは、家を絶やすことなく、繁栄させていくことにあった。【B】

どこにでも生えているカタバミは、じつにしつこい雑草である。抜いても抜いてもなくならないし、そこら中に種子をばらまいて広がっていく。戦国武将たちは、この小さな雑草のしぶとさに、自らの子孫孫までの家の繁栄を重ねたのである。

カタバミは、けっして強そうな植物には見えない。【C】

日本では「雑草魂」や「雑草軍団」という言い方をする。やっかいな邪魔者である雑草を、ほめ言葉に使うのは日本人くらいのものである。日本人は雑草を観察し、雑草の強さを見ていたのである。【D】

カタバミに限らず、日本の家紋は植物をモチーフにしたものが多い。

虎や龍など、強そうな生き物はいくらかでもある中で、植物をシンボルとして選んでいるのである。

見るからに強そうな生き物ではなく、何事にも動じず静かに凜と立つ植物に日本人は強さを感じた。私たちの祖先は「本当の強さとは何か」を知っていたのかも知れない。

(稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか』)

(注1) 家紋：それぞれの家で定めている家のしるし。

(注2) モチーフ：作品を生み出すときに動機やきっかけなど中心となる題材。

(注3) シンボル：考え・価値など形のないものを表現するための具体的なしるし。

(注4) 凜と：きりつとひきしまつて厳しい様子。

問一 — 線①「人々は、踏まれても負けずに立ち上がる雑草の生き方に、自らの人生を重ね合わせて、勇気付けられる」とありますが、雑草が「踏まれても踏まれても負けずに立ち上がる」ことについて筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 将来のために着実に実力を蓄たくわえていると考えている。
- イ 効果のないことに力を使い果たしていると考えている。
- ウ 報ほうわれない努力なのに挑もく戦し続けていると考えている。
- エ 根性こんせいが必要なことを立派にやりとげていると考えている。

問二 

I
---

III
-----

 に入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。同じ記号を二度使ってはいけません。

- ア さらに
- イ つまり
- ウ しかし
- エ だから
- オ そもそも

問三 — 線②「『変えてはいけないもの』とありますが、「変えてはいけないもの」とは、具体的にどのようなことですか。本文中より十三字で抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問四 — 線③「不思議なこと」とはどのようなことですか、解答欄に合う形で、本文中のことばを使って十五字以上二十字以内で答えなさい。

問五 — 線④「御世辞にも美しい花とは言えない」とありますが、「御世辞」の使い方として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 弟の悪い習慣を御世辞にもやめてくれとは言えない。
- イ 在校生を代表して卒業生への御世辞のことばを述べる。
- ウ その物語には冒険を愛する主人公の御世辞が<sup>ほう</sup>つまっている。
- エ 心にもない御世辞を言うと、誰からも信用されなくなるよ。

問六 — 線「いく」と異なる用法のものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 季節が冬から春へと変わっていく。
- イ 帰りに本屋に寄っていくつもりだ。
- ウ 祖父は毎日図書館まで徒歩でいく。
- エ 他人の行動を見て多くを学んでいく。

問七 — 線⑤「日本人は雑草を観察し、雑草の強さを見ていたのである」とありますが、「雑草」の様子が具体的に述べられている一文を探し、最初の四字を抜き出して答えなさい。

問八 次の文は、本文中のどの場所に入りますか。最も適当な場所を【A】～【D】より選び、記号を答えなさい。

しかし、戦国武将たちは、そのカタバミの強さを知っていたのである。

問九 — 線⑥「『本当の強さとは何か』とありますが、筆者は「本当の強さ」とはどのようなことだと考えていますか。最も適当な

ものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア どんな状況きょうにも左右されることなく、しっかりとその場所に存在そんざいしていること。
- イ 突然発生するさまざまなできごとに対応できるように、常に準備を忘れないこと。
- ウ 誰に対してもおだやかに平等に接し、存在を周囲から認められ尊敬そんけいされていること。
- エ 何が起きても自分の場所を明け渡わたさず、つらい状況でもひたすら耐え忍しのんでいること。